837
6
82

職原抄校本　下之末

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82

ガラス使用

守を加美(カミ)とよむハ上(カミ)の義也靈異記に國上とあるゝ正字也但これハ國守にかきることにもあらず卿頭正督等を加美(カミ)と訓むもとなこれに同し

權守ハ多くハ遙任也遙任とハ國に下りて受領とは京に居て守介を稱るをいふ但ふるく權守受領のともなきにハあらず

その時ハ正守遙任也

因云後世武家に國司の名を称るにハ權官なし武家の守介といへども勅許に依ることハ勿論にていひもてゆけハまつハ遙任の類なから二判問答に權守事於武家之所望者不可有勅許之由有其沙汰云々是又至勝定院殿御代有其例為其以後被停止哉とあるを見れハ足利家よりの例也

又云孝德の御代に國造の國を治ること停まりて國守出来られともいまゝ守介掾目四等の名ハなりうさ文武制令の時に至て始てこれを置れより但このをりハいまゝ

守 相當從五位上

權守

介 相當正六位下

權介

大掾 相當正七位下

權大掾

少掾 相當從七位上

權少掾

大目 相當從八位上

根岸信輔氏寄贈

昭和八・七・十四 帝圖

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82

ガラス使用

權官といふものはなりしなりさて四等の差別は守政事を掌る介これに次て守を助く故に須介は助に同し掾目共に公文を掌るその内掾を志與守と訓むは承也守介の裁許を承て事を行ふなり目を佐官と訓むはその義詳ならぬといへとも その職は今いとも筆者也この下に史生あれとも此抄に載ぬ

少目　相當從八位下

上國

守　相當從五位下

權守

介　相當從六位上

權介

掾　相當從七位上

權掾

目　相當從八位下

雖六位とは六位にていまた五位に叙しはせねとも大上國の守にはなりつれは執筆大臣押て大間に從五位下と書て位記は後に給ふ也

介を中國に置れし事　三代實錄貞觀七年五月の件に見也

大上國守相當五位也依之其身雖六位除目之時執筆之人押以書從五位下不待勅處分者也

中國

守　相當正六位下

介　官位令中國無介

掾　相當正八位上

目　相當大初位下

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

掾を下國に置れし事三代實録貞觀七年五月の件に見ゆ

古来板本古今に作れり今諸本に依て改む

歷七箇國受領云々ハ北山抄に國司加階事一箇國従上三箇國正下四箇國四位五箇國従上七箇國可任三木是常例也とありかく一箇國二箇國と受領を歷て昇進はるゝな合格にあらされハかなハさること勿論也然ともその合格も令制の如く給否を考校し善惡の等差をふしくきらるゝにハあらは故に令例の合格にハ上文に昔時の字を用られたりこゝハ延喜天暦の比よりもゆゝ後の事なるゆゑ合格とあるなり泛說

下國

守 相當従六位下

掾 相當従八位下

目 相當少初位下

凡國司者相當五位以下也然而雖四位已上或隨其望或應其撰古来之例也或說歷七箇國受領合格之吏勘公文畢拜參議云々白河院仰

白河院仰れ何書に見えたるか未考

太守とハ親王任國にいふ名なり今國主を太守といふひとも也但ふるくも文雅の上にてハ守を大守ともいへることあり江吏部集に備州先太守なとある類なりこハたとへハ源氏物語に介を守といふるか如し彼を以て此を誣へたるに

親王任時不知吏務これ遙任なれハなり通典云大唐太極初以拜益荊揚為四大都督府開元十七年加潞州為五焉其餘都督定為上中下等凡大都督府置大都督一人親王為之多遙領其任亦多為贈官長史居府以總其事云々本朝の太守もまたこの唐の大都督に倣て建られたるなり三代格天長三年九月六日太政官府に上總常陸上野右云々親王任八省卿此人地望素高不得就職仍政迹日蕪非是庸愚之所致地勢使然也望請點定數國為親王國迭任彼國身留京師意欲居京官者一兩人將聽若有守闕者

但可依其才云々又大守者為親王置之親王任時不知吏務仍件國以介為守乃令知吏務也權守者近代多是遙授之官也參議二三位中將少納言等必兼之又殿上六位藏人叙位之時預爵者即任權守又例也納言以上貶謫之時任諸國權守也仍常儀參議兼國任納言之日即止

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

之介權介者辨官近衛中少將等兼之

畿内

山城上　大和大　河内大　和泉下　攝津上

東海道

伊賀下　伊勢大　志摩下　高橋氏為内膳正者任之仍

他人不任之　尾張上　參河上　遠江上　駿河下

伊豆下　甲斐上　相模上　武藏大　安房中上　總大有太守　下總大　常陸大有太守

東山道

近江大　美濃上　飛騨下　信濃上　上野大有太守　下野上　陸奥大　出羽上

陸奥出羽按察使府

按察使　相當從四位下　唐名都護

近代納言以上兼之

不補他人其料物者納置別倉支充品親王要伏聽之載者正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣奉勅依奏但件等國守官位卑下宜改定正四位下官以為勅任号權大守限以一代不可永例之者此官府之文意八上總常陸上野之數國を親王の任國と點定一これを任しその事を八京師に留めおんとなり

介為守とハ親王遙任の太守の下に介を以て守として政事を行ハしむる也弁疑の説非也まと上文引ところの格に因て大守の闕ありとても親王ならぬ他人なハ補をれぬ也その時ハ闕のまゝ守の任をしてその料物を別倉に納置一吏務を介にまかするなり介為守の義のれハゝよく明らなり況や為字本擬と作ればうたがいと穏當也

權守者云ゝ者諸國の權守也近代二字顯統本速水本等死一然共古本有之猥

之に除くゝ上古正守受領なれハ權遙授若權守受領なれハ正守遙授也てハ近代權守を受領ハなき事をいうなれハ近代の字あるもの一

納言以上とハ中納言より大納言まてなり職論の時ハ官位を減もうけ論ハ有罪を罰する也大中納言の職論ハ諸國の權守の例也故に權守を兼任の事禁忌と云仍て參議より納言に任じる日これまて兼るし國守を止て離るも

畿内とハ詩經に郊數千里惟民所止と云る義也細註云五箇國

山城ハ大和の下にあり平安城建て後天子所居の國なる故に第一となる續後紀承和三年十月承前之例畿内國次以大和國處之第一宜援新式改之以山城國處之第一東海道云々の諸道共に大和の都より四方に開き達らんめるものなり故に東方の海に屬る國々を經て往く道を東海道と云即大和の東に隣て伊賀あり新式に

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82　　ガラス使用

依て山城の都よりかたつかたに伊賀と大和を
隔たるゆゑにまづ東山道を挙てその次に東
海道を載る合ひ理なれ兼和の制さ
帝居の國ものを改てるるとおよばれるゝ
孔諸道ごとな大和より發路の順次なり
と思へり細註云十五箇國
志摩ハ供御の魚貝を漁る國なるゆゑ内膳
正ると者兼任也
東山道ハ大和の都より東方の山と属する國ぐ
を經て往く道なり細註云八箇國
按察使府の府字職官志と行とそりぬて
使を称する職ゆへさまざまの治所なりと
ハ檢非違使の如き彼章の細註と本所
乃載員廳也といへり勅負ふり非違の事
を兼て糺察の為と内外を巡撿を司應
と留り居て事を行ふ官なり故と
使とふ使ハ四方と行役する称なり
れ尋常ハ四府の官人なて勅負廳と
居れと非違を撿る為と巡行とさハ撿
非違使也按察使も此例の如く國守を

記事

鎮守府

将軍

副将軍

軍監

軍曹

陸奥者上古以来為邊要下其國境
廣元明天皇和銅五年九月分置出

羽と除くと上古正守受領なれ權遥授
若権守受領なれ正守遥授也ゑハ近
代権守と受領ハなき事をふるなれ近代の
字あるもの
納言以上とハ中納言ふり大納言まで也ふり既
謫の既ハ官位を減もうなり謫ハ有罪を罰
ふる也大中納言の既謫ハ諸國の権守の例也
故と権守を兼任の事ハ禁忌と代ゆて参
議ふり納言と任ふる日これまて兼ふし國
守を止て離る也
畿内とハ詩經と邦畿千里惟民所止とふる
義也細註云五箇國
山城ハ大和の下にあり平安城遷て後天子
所居の國なる由名と第一となる續後紀兼和
三年十月承前之例畿内國次以大和國處
之第一宜擬新式改之以山城國處之第一
東海道云々の諸道共と大和の都ふり四方と
開き達らしめるるものなり故と東方の海
と隔る國々を經て往く道を東海道と云
即大和の東と隣て伊賀あり新式と

伊豆 下
甲斐 上
相模 上
武蔵 大 安
上総 大 有 太守
房中
下総 大
常陸 大 有 太守

東山道

近江 大
美濃 上
飛騨 下
信濃 上
上野 大 有 太守
下野 上
陸奥 大
出羽 上

陸奥出羽按察使

按察使

相當従四位下
唐名都護

近代納言以上兼之

彼て出城の都よりかたちにて一日留て和を
隔なる由云〻まつて東山道を撃てその次て東
海道を截て合ハせ理なれと兼和の制て
帝居の國吉のミ改てるてハ却てハれさるを
ハれ諸道ハミな大和より發路の順次なり
と思ハ一細註云十五箇國
志摩ハ供御の魚貝を漁る國なる由云〻内膳
正なる者兼任也
東山道ハ大和の都より東方の山に屬する國〻
を經て往〻道なり細註云八箇國
按察使府の府字職官志に衙とそりて
使を称する職ハさまれる治所なしたゝ
ハ檢非違使の如き彼章の細註に本所
乃勒負廳也といひ勒負ハ非違の事
を兼て糺察の為に内外を巡檢する司廳
に留り居て事を行ふ官なり故に
使とハ四方に行役する称なりさ
れハ尋常の四府の官人にて勒負廳に
居れと非違を檢る為に巡行ときハ檢
非違使也按察使も此例の如く國守も

記事

鎮守府

將軍

副將軍

軍監

軍曹

陸奥者上古以来為邊要為其國境

廣元明天皇和銅五年九月分置出

羽國元正天皇養老三年置按察使

令監察兩國事聖武天皇元年陸奥

國内又置鎮守府〻國相並行國事

云〻

按察使なるハ守のごとくつきてハ
府に居一使のごとまつきてハ所管の國
〻を巡行ハる任なる故に府の字ある
を理なりなき使の事別記にいふ
一此使諸國に置れくる始ハ養老三
年なり然共陸奥出羽按察使の所
見ハ續紀養老五年八月件に出羽緑
陸奥按察使とあるを始なり
近代納言以上兼之後紀大同四年三月戊
辰東山道觀察使正四位下兼行右衛
士督陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣
為ハ邊任辭ハ内表召昇殿上令與侍従五位上永原朝臣子伊太比賜ハ次一襲被等とありていと重き任也さく大中納言の兼帯ハくらゐと多一
記事諸本載ハ續紀養老三年七月庚子始置按察使一西午置按察使典四年三月巳巳改典号ハ記事ハれハり尊卑分脈ハ按察使記事ハ
佐官宜亦称記事云〻
鎮守府のこと下件ハり件ハ澤卿ハあり
邊要ハ海邊要害の義也民部式云陸奥國出羽國佐渡國隱岐國壹岐島對馬島右四國二島為邊要
分置出羽國續紀和銅五年九月巳丗始置出羽國
養老三年置按察使の三ヲ抜本二ヲ誤れり續紀養老三年七月庚子始置陸奥出羽按察使とあり因て按ハ養老三年ハり四五年の間ハ陸
載ハれとも陸奥出羽ハ見ハれ同五年八月癸巳の件ヲ至て出羽緑陸奥

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

奥按察使ハ補ゝれ之なれとも出羽ハそのまゝなり一あれハ陸奥出羽按察使と又号ハ養老五年
ゝ始ゝれりと云へ一されハ養老三年置按察使と書ゐ(ゐ)ハ續紀よりて當時のさまを考へ一も推量りゐさりしなるへ一故ゝ置
按察使の文ゝて句を斷て令監察兩國事の令字の上ゝ五年ゝ出羽を陸奥按察使ゝ兼ゝると知て見るへ一
聖武天皇元年云々の元字板本ニゝ作る今古本類本ゝ依て改む又置鎮守府
直南淵麻呂等獻私穀於陸奥國鎮所並授従五位下まゝこゝ卯陸奥國鎮
妻子共同生業許之これ陸奥ハ邊要の最たるを以て大野朝臣東人宮城郡ゝ多賀城をおゝ鎮所と定たるゝ依て或ハ兵粮の爲ゝ
私穀を獻る者もあり或ハ此城の部内ゝ附貫ゐる卒もありて神龜元年ゝ漸く開府のほとゝのゝる故ゝや碑の文ゝ多賀城此
城神龜元年歳次甲子按察使兼鎮守將軍従四位上勲四等大野朝臣東人之所置也とあるハ城郭の營構成就ゝりて建ゝるもの
なるへ一されハ續紀の神龜元年の前後ゝ並一く鎮守府とかゝる号ハなかれとその多賀城ハ鎮守府の始ゝること疑ふ
ゝ足ゝ又宮城郡坪浦在松山之右出温湯坪碑有鴻池爲故鎮守府門碑とあるゝて知へし橋逸勢ゝ多賀城碑ハ伊達吉村朝臣大
ゝ巨萬の財を費一宮城郡一里四方を地下五尺ゝて堀さゝれてその掘出さる坊ゝ和名抄ゝ國府在宮城
郡鎮守府在伊沢郡とあるハ日本紀略ゝ延暦二十一年正月丙寅遣従三位坂上大宿祢田村麻呂造陸奥國胆沢城ゝ見へて今年多賀城を
廢一軍府を伊沢ゝ移されゝるこれより後鎮守府ハ伊沢郡と定れるゝ依てかゝる也ゝり然ゝを三代格ゝ弘仁三年四月巳丑太政官符定鎮
守官員事將軍一員軍監一員軍曹二員醫師各一員右被右大臣宣偁奉勅鎮兵之數減定已訖其鎮官員數宜依前件ゝ
ゝ巳丑減ゐ員鎮守將軍三人減一人定二人云ゝを據ゝて或人の鎮守府ゝまゝ一くいゐるゝるハゝの官員を定られ一
時なるへ一故ゝこれより後ハ鎮守將軍を鎮守府將軍と稱て國府ゝ相並ひ軍政をなせる欤といふ説あり建武年間記ゝ
載る頭家卿の奏狀なるもこの趣なれと府字の有死ゝて將軍の号ゝけちめあ。事まゝハ三代格なる官府ゝまゝ鎮守府
將軍とあるゝゝを鎮守將軍とのゝあるを以てその説のひゝとあるを知へ一たゝゝハ太宰府の帥を太宰帥とゐ如く鎮守
府の將軍なるゆゑゝ鎮守將軍とゝゝなりゝゝて府字をそへゝるハ俗稱也弘仁三年の度なるハゝて官員を定ら
れるのゝみなれハこの抄ゝ聖武天皇元年とある即神龜元年の事ゝて鎮守府の始ハ當年なりと定へき

秋田城介

為出羽介者兼之除目不任之被下

秋田城、

宣旨ヲ也、

北陸道

若狹 中　越前 大　加賀 上　能登 中　越中

上　越後 上　佐渡 中

秋田城の下瀬本在出羽ゝ細注あり此城の所見の始ハ元明紀和銅二年七月ゝ令諸國運送兵器於出羽柵爲征蝦狄也とゐ
五年十二月ゝ出羽柵遷置於秋田村高清水岡ゝこれより秋田城とゐ此城延暦廿三年十一月ゝ停ゝれること日本紀略
ゝ載ゝりその文ゝ秋田城建置以来四十四年土地墝埆不宜孤居北隅死難相救宜停城爲郡とゐりきゝれゝ依ゝ
ハ延暦廿三年より四十四年以前ゝ置れることあるなれハ天平五年ゝ秋田ゝ遷置のゝ一聖武紀ゝ所見なるハその義の
決一なるゝ依て擧られるのゝみてその實ハ廢帝の天平宝字五年ゝ城築さるなるへ一
當年より延暦廿三年ゝ至て四十四年なりその後光仁紀宝亀十一年八月夫秋田城者前代將相參議所建也鎮敵俘民久
経歳序一旦棄而棄之甚非善計也宜遣多少軍ゝ為之鎮守加令斡旋歸服之
情仍即差使國司一人以為專當ゝ見
也ゝと置れることかゝの如一この國司一

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

人とあるハ即出羽介也

北陸道とハ大和より北の方陸地ニ就て行く道也佐渡ハ海路なれと多きなきの名ニ属するものなり細註云七箇國

山陰道の陰ハ北也大和より發て山の北ニ随ひ下り行く道也細註云八箇國

山陽道の陽ハ南也大和より發て山の南ニ随ひ下り行く道也細註云八箇國

南海道ハ大和より發て海路ニ随ひゆく國々なりその内紀伊ハ通く大和ニ接て海上の國ならねと多きなきの名目ニ属なるもの也細註云六箇國

山陰道

丹波上 丹後中 但馬上 因幡上 伯耆上 出雲上 石見中 隱岐下

山陽道

播磨大 美作上 備前上 備中上 備後上 安藝上 周防上 長門中

南海道

紀伊上 淡路下 阿波上 讃岐上 伊豫上 土佐中

西海道

太宰府

帯筑前國當唐大都督府

聖武天皇天平十五年始置筑紫鎮西府先是有太宰府號云々天平寶字二年勅諸國司以四箇年為任限寶龜十一年勅太宰任限為五箇年云々凡當府都管九國二島別帯筑

西海道ハ山陽道を下りて長門よりまたり海邊ニ傍ひゆく道なるゆゑにかくいふ細注ニ十一箇國然而云九國二島細注云除壹岐對島二島云六十六箇國

太宰府を置れし始詳ならぬ推古紀十七年夏四月筑紫太宰奏上と見え持統紀ニ三年閏八月以浄廣肆河内王為筑紫太宰帥と見ゆこれらニ依るにいと舊くより太宰府ハありしなるへし職員令ニ太宰府本注ニ帯筑前國とあり令集解大同三年五月十六日奏云省太宰府監典各二員置筑前國司事守介掾大小目各一員右謹案令條太宰府帯筑前國自爾已来或別或隷至延暦十六年又廢國隷府今得府解你臨交替事細加撿挍未進調庸并欠失正税器仗戎具等類毎物有數此是

摂行之日彼此相譲无心國政之所致也望請分置官人以為別當專一其心令濟國務然則帯國之名不乖令條欠貢之煩絶於國内者臣等商量承前府帯之時或下官符而定別當或府司相量分置其人同像之官兼預國務曲責雜怠不同此國省大同元年所增監典便充補國司廢令所守有別各濟繁劇謹奏聞之時より府と國と別となれり然ども太宰府八九國二島を管領して三韓諸蕃を朝貢をむ鎮守府武を以て蝦狄を鎮むるに對て文を以て懐遠を服する故に文徳實録に西極之大壌中國之領袖也東以長門為關西以新羅為拒加以九國二島郡縣懸遠自古于今以為重鎮者二代實録に鎮西者是脱之外朝也千里令將一方寄重と見えたり

天平十五年云々聖武紀天平十五年十二月始置筑紫鎮西府以従四位下石川朝臣加美為將軍外従五位下大伴宿祢百世為副將軍判官二人主典二人これなりその前年に太宰府を廢をれたり太宰府おれハ帥以下官位高きを鎮西府にて八將軍以下官位卑しきのゆへ權帥条ゐいへり同紀に天平十四年正月廢太宰府遣右大弁従四位下紀朝臣飯麻呂等四人以廢府宮物付筑前國司と見也然あて纔に十四年より三年をへてまた舊のかくをれたり同紀天平十七年六月復置太宰府

天平宝字二年云々國司の任限選叙令に依て長上官遷代皆以六考為限とあるを看れハ始八六年なり二續紀慶雲三年二月に減二考為限と見えをれハこの時四年になれるなり弁疑に天平宝字二年の紀文に八國司の任限四年なるを増て六年に定め更生の任限六年なるを減て四年とをれたり然るに此抄に諸國司以四箇年為任限とあるハ誤也また宝亀十一年太宰任限為五箇年ハ續紀なり其後世に依り時に随ひ年限の舒縮一定なしとをり二を兼和二年以来國の遠近によりて四年五年の限と定られたりと見也といへりこの説の如一但三代格兼和二年太政官謹奏中畧伏望國司令歴因循慶雲一用四年但陸奥出羽太宰府等僻在里去来多煩宝亀十一弘仁七両年格事近便宜不可改とあり如此文中なる宝亀十一年即此抄宝亀十一年大宰任限為五箇年と見えをれて續紀も同一弘仁七八此抄に載をれたる三代格に據去年七月十七日論奏四年為限唯西海一道五年如常愚臣商量遠要之設東西是同伏望陸奥出羽

兩國司等皆准西海道五年相替とあるこれなりその後この四年五年の制変改なりしと見えて管家文草に一秩四年盡忠節一本朝文粋に況将四年相隔後拾遺集藤原道信朝臣の四とその春やとるあきとよめる花の都をいでしより木の四とその春や霞へるらんなとハ諸國の國司の任限也後紀大同三年太宰府并管内諸國官人歴以為五年玄々集大貳有國卿五とをいへるハ一の杉ともつくてをこなひハ梅の花のさかりをへ後葉に經信卿帥となりて下るる別をしまひて庫守國基六とをいへる君八来ぬ住吉のまつをも身こそいく老ぬれ八なる大宰の任限也國基の六とをとよめるハ五年に交代して六年に歸り来るをいへるにてなるべし

帥ハ二音あり一ハ所律反にて帥其と中ごと用語のときの音也一ハ所類反にて將帥元帥なと躰言に用るときの音也この帥ハ長官の名なれハ躰言の例にて所類反のこゑを用ふへきに所律反のこゑを用ひてソツと訓る由あることは未考

以有品親王任之とあれと親王六下向一王公にらく遥任也故に親王任之者ハいへり杜氏通典に凡大都督府大都督一人親王任之多遥領其任とあるに同一大臣をも兼らる例ハ續紀天平十八年四月以左大臣従一位橘宿祢諸兄為養大

帥

唐名都督　相當従三位

勅任官也多是以有品親王任之親王任之者權帥若大貳知府務而已

權帥

納言以上若前官任之中古以来例

宰帥其後絶而不置也
納言以上ニ中納言以上大納言迄ヲ云フ
大臣ノ権帥ハ賤職ノ外其例ヲ聞ク
中古以来例云々日本紀ニ曰ク弘仁三年正月式部卿三品葛原親王為兼大宰帥其後ノ臣下ヲ任ゼラレテ一定セリ
江兼和嘉祥ノ比ヨリ正帥ハ親王ノ官トナレリ故ニ権帥下國シテ府務ヲ掌レリ但シ此ノ二人臣ヲ以テ正帥ニ
為テ府務ヲ掌ラシムル事モナキニ
あらず或ハ任ニ依時宜歟トイヘリ
左遷ハ貶降ノ義也潛確類書ニ漢世尊
右卑左故ニ貶秩為左遷而進居高
位者為栄職漢書註ニ師古曰ク上古以
右為尊故謂降秩為左遷野客
叢書ニ魏晉以還右卑左尊ヲ
貶降ヲ左遷トイフハ漢世ノ事ニテ彼
土ニテモ後世ニモ言ヘリ況ンヤ
本朝ハ神代ヨリ左尊右卑ノ制定リ

於正帥者擬親王官承府務人任權
也或又任正依時宜歟為大臣之人
左遷之時任權帥然而不可知府務
也凡於帥者令條所定已為高官仍
重其仁雖華族又任之
大貳
無權官相當従四位
下唐名都督大卿
近代例多以參議散二三位等任之
非參議四位又有其例有權帥者不
任權貳任大貳者不任權帥雖無其
謂已為流例多是以名家人任之
少貳
相當従五位下
唐名都督少卿
權少貳
殊撰其人任之
大監
相當正六位下
唐名都督郎中
少監
相當従六位上
六位侍任之

より以来一定してかくの如ク左遷ヨリ
云ふ時理なれど熟字ゆゑて改ずれ
ぬなり
大臣ニて権帥ニ左遷の例
右大臣豊成普丞相左大臣高明内大臣
伊周松殿關白基房等なり
大貳の相當令ニて八正五位上官なり後
紀大同元年二月丁未勅准令大宰大
貳是正五位上官宜改為従四位下官
散二三位の二字秘抄ニ
有権帥者云々江家次第云有権帥時不
任大貳まゝ秘抄云権帥在任之時不
任之権帥大貳間一人為吏務故也
西宮記云帥大貳赴任事藏人奏聞
依仰召御前自青瑣門參入給禄
酒給御衣一襲諸卿參上勧盃諸卿
坐西面帥貳坐北面給禄後下拝舞
出自仙華門或別召之
殊撰其人秘抄云管國受領中選人任之或
別任之

監典後紀大同元年六月己丑勅增加大少監大少典各一員

公卿給の事ムリしく太政官条にいへり

雖請任之の雖字板本依に作る弁疑云古本雖のかゝ下の文にうつりてよく通ぬ云々今按に公卿給の時任ぬきその公卿より其人を申さゝ事なれども多くハ然ともあらて府中有縁輩を任ぬと也有縁輩とハ典より監に任し史生博士等より典に任ぬる類久しく府官なる故にいふなりまた大貳少貳の親属其外數代筑紫に居る者をいふ源氏玉ゐつゝなる大夫監の事なりとかうへ合ぬへし

大典　相當正七位上　唐名都督録事

少典　相當正八位上

監典者公卿給時間雖請任之多是府中有縁之輩任之稱府官是也此外博士算師大唐通事等上古任之中古以来斷絶仍畧之

筑前上雖為都督所帯守已下官如例　筑後上　肥前上　肥後大　豊前上　豊後上　日向中　大

此外云々今に依るに大小判事大少令史大少工博士陰陽師醫師筭師等もあれど通事なし延喜式にハ載られたりされハてに上古とあるハ延喜以来也

都督とハ帥のことなり九州をぬへ掌るゆゑにいふ唐書に都督掌督諸州兵馬甲械城隍鎮戍糧稟惣判府事

外官ハ内官に對する稱也内官とハ官省寮司の京官をいふ外官とハ大宰其外の國司をいふ

諸衛とハ下に載る所の六府の事也今條にてハ衛門左右衛士左右兵衛の五府也その後聖武紀神亀五年八月置中衛府大將一人從四位上少將一人正五位上將監四人從六位上將曹四人從七位上府生六人番長六人中衛三百人使部以下亦有數其職掌常在大内以備周衛まて廢帝紀天平宝字三年十二月置授刀衛督一人從四位上佐一人正

隅中　薩摩中謂之九國　壹岐下　對馬下謂之二嶋邊要

已上諸國司謂之外官然而文官之列也

諸衛

左右近衛府　當唐羽林　又云親衛

元者近衛中衛也平城天皇御宇大同二年勅以近衛為左近衛以中衛

五位上大尉一人従六位上少尉一人正
七位上大志二人従七位下少志二人正
八位下元ゝ以前慶雲四年七月の
件ゝ授刀舎人寮和銅元年三月ゝ帯劔
寮養老五年ゝ授刀寮とあり皆松ゝ
司なり然るに寮屢ゝ改てあぐ
の
恩とその舎人を八諸衛ゝ分隷しこうんとおうしてて孝謙紀天平勝宝八年五月左衛士督坂上弋養のことなり件ゝ其所ゝ従授刀
舎人とひとしと見えたり是その一證也その後授刀舎人を中衛府ゝ属をしめ玄ゝ同紀同年七月ゝ授刀舎人考選賜禄を籍者
悉属中衛府其人数以四百為限闕即補但名授刀舎人勿為中衛舎人其中衛舎人亦以四百為限しありかゝ中衛府ゝ属
をしめられとも八ゝ名籍のミて正身八なお諸衛ゝ分隷をり但中衛府の舎人神亀五年ゝ始置れ一時八その員三百人な
りしをゝて至て限ゝ四百を以て一授刀舎人と定へて八百人その内中衛舎人四百八中衛府ゝのミ使八ま授刀舎人四百八諸衛ゝ使八
ゝて勤仕の途八各別なりを然ゝ上ついる如く天平宝字三年ゝ授刀衛の一府を建置ありてこれまで中衛府ゝ属をし授刀舎
人ゝて於て授刀衛ゝ属をしめられより依てその時より中衛府ゝ舎人四百人ゝて授刀衛ゝ舎人四百人授刀衛ゝ舎人四百人となりゝ其後稱徳紀天平神
護元年二月改授刀衛為近衛府其官員大将一人正三位中将一人従四位下少将一人正五位下将監四人従六位上将曹四人従七位
下なり近衛とふ称ゝをしめてゝ見ゆまゝ同件ゝ又定外衛府官員大将一人従四位上中将一人正五位上少将一人従五位
上将監四人従六位上将曹四人従七位下とあり令條の五府ゝ中衛近衛外衛の三府をゝへて八府となりり然ゝ光仁
紀宝亀三年二月罷外衛府其舎人者分配近衛中衛左右兵衛ゝて於て七府となる紀畧公卿補任等ゝ依る
ゝ大同二年四月改近衛中衛為左右近衛をし職員令集解を考ゝ大同三年七月ゝ衛門府を罷てその職を左右
衛士府ゝ属をしむるゝ於て左右近衛左右衛士左右兵衛の六府となるその左右衛士府を弘仁三年十一月ゝきと
左右衛門府と改む令條ゝて八衛門八一府なりしをゝひ左右二府ゝきりゝ是八大同三年ゝ六府となり弘仁三

為右近衛唐朝殊重此職統領諸宿衛禁軍故也本朝又為重任

年ゝ左右近衛左右衛門左右兵衛の名定りしより今ゝ至てかゝる事なし

近衛とハ震居ゝ近く侍衛ゝよりて依てしかるの左府ハ陽明門内ゝあり右府ハ殷富門内ゝあり
元者近衛中衛の元字令條の昔ゝ及りて看ゝてゝ令條ゝハ近中の二府なき事上ゝきゝ
天平神護元年ゝ近衛府出来より以来をゝ保延元年二月七日の長秋記中衛大将是何職乎答云謂右大将近衛大
将謂左大将

唐朝殊重此職とハ大典を考ゝ三師三公正一品尚書令正二品左右僕射正三品左右丞相従二品なり其外ハ六部の尚書正三品なれども
その侍郎ハ〻ゝ次正四品下なり然ゝ左右衛左右武衛左右金吾左右羽林なるの類をな大将軍ハ正三
品将軍ハ従三品なり諸衛の将軍ハ六部の侍郎と同一をを彼ハ正四品下これハ従三品なるハ殊ゝ此職を
重ずるなるべし

超次第ゝハ假令ハ摂家の大納言ハ下
臈とゝも凡家の大納言の上臈を
超越て任ずるなり
為規模これ大臣ゝて大将を帯するハ
文武兼帯なる故なり元永二年正
月六日中右記ゝ大臣後任ゝ左右大将
人〻右大臣源光任右大将内大臣藤
通隆任左大将内大臣藤師実任
左大将内大臣藤信長任右大将左

大将

相當従三位唐名羽林大将軍常云幕府又云大樹惣取

将軍之稱也

非譜第之華族者更不任之多是大

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

大臣源俊房任左大將内大臣藤忠
通任左大將此外多大納言被成大
將也
凡人ニさまたげハ上田村麻呂巨勢野足左ハ
平重盛宗盛の類の清華なる人を
をく
師通兼暦元年三月廿七日任參議四月九日
兼左大將然とも參議の時任之例外
にも多し任官勘例ニ參議兼大將例
巨勢野足藤冬嗣文屋綿麻呂藤吉
野橘氏公源常行後二条殿と見也
此抄ニハ其内の一を舉て他を知らを
なり月のごとし
非參議以下二十字古本類本共ニ死一
但顕統本速水本ニハ近代以下の
十字ハあり且弁疑ニいへる如く氏宗
ハ中納言の時右大將を兼ねハそ
ニ合ス印本氏宗とある非也氏
公ニ作一ハ公卿補任ニ橘氏公天
長十年正月七日従三位三月廿四日

納言中譜第上臈任之於執柄息者
超次第所任也又多被任左也至大
臣帯之為規模又中納言任之於凡
人者彌為眉目參議時任之例後二
條關白師通公也非參議人任例氏
公公也近代不可有此量者歟又
任大將人其儀大略同大臣只守位
次着座計也其外内外作法不混餘

右近大將依帝外舅也とある是なり
任官勘例ニ散三位任大將例氏公公
其儀を板本其職掌ニ作ハ非也古本類
本を以て改む

中將秘抄云舊例一府中將一人少將二人中
古以降中少將各二人而一府八人例始
自承徳二年又久壽二年院宣云自今
以後左中將四人少將四人右中將四人
少將四人并十六人且為定數近来超過
此員數多ニ是より後いよ〳〵員數多く
なり〳〵て元久元年四月十三日明月記ニ在
朝中少將皆非人每除目剰加五十人
末代中少將不異匹夫とあり

華族四位云ミ秘抄云四位少將轉之
一世二世源氏云ミ元永二年十一月廿八日中
右記云披見聞書之處三位中將有
仁任權中納言源氏中納言中將和
例也中納言中將自昭宣公至當時
内府七人皆藤氏人也

人者也

中將
相當従四位下唐名羽林中郎將
親衛中郎將或云虎賁中郎將

權中將

華族四位任之執柄息若一世二世
源氏中納言時兼之凡人無之實朝
公是也非常之極歟清華之人參議
時兼之中絶之家無帯為無念之儀
也二位三位中將非大臣子若孫者

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

實朝公東鑑承元三年五月廿六日右中
將建保四年六月廿日中納言七月廿日
兼左中將
參議時兼之右古例也河海云稱德天
皇天平神護二年正月八日石上宅嗣
任參議元中衛中將宰相中將始
也
中絕之家云中世沈淪一て先祖の如き
高官に進ことかたき者時に遇ひ殊
恩を蒙りて兼帶ふるはかりと清華
の家といへとも死念也となり
五位時任之淺深秘抄云五位中將
與四位少將着坐樣難儀也小野
宮右府記可依位云々公任行成兩
卿說可依官云々先賢意見已區也猶可依官非府役時可依位故是弁官於言中者依言次於女房上者依位故也
英雄大臣息の五位中將に任ふるは近代の事也となり 猶二西園寺家北條に縁あるに依て關東の勢ま
依て五位中將多し
隆房は諸大夫家なれは中少將に任へき家にあらす後附に諸大夫者六條修理大夫顯季餘流此号四條隆房大納言
初任近衛將以來昇進多如公達家とあるこれなり 隆房の父を權大納言隆季と又小松重盛公の室兄也隆

不任之至二位中將者執柄息外希
例也五位時任之執柄息外不可然
云々英雄大臣息任之近代事也非
強雖非英雄重代拜任家有之

房まて重盛の妹聟にて平家の權威をかりて鷺坊の思ひをなし終に五位中將たるを
非英雄重代と英雄ある重代と非ての義也
少將は大中少の次を以ていは中將の次なれと
和名抄に中將少將共に須介と訓れは大將を長官にて中將少將の次官
なる事論なし源氏物語螢に中少將
の事を次に達といひ空物語樓上に
大將の詞にうへのおはしけるにとあ
るは中將のことなり建久七年四月廿二日
明月記にひえのちかまりのつぎのこ
んのすなのはけ藤原定家とある少將
のこと也
叙四位時云々少くは直に中將に轉ぜ
四位になれは他官に遷任するなり
但叙留とは四位に叙してもなを元のまゝ
少將にてあるは殊恩也
四位後拜任は常事にて規模なり
是古例也とは天長十年二月に藤良房
藏人頭にて從五位下左少將なりしれ

少將

相當正五位下唐名
羽林次將親衛郎將

權少將

五位殿上人中為譜第公達者任之
叙四位時去其職但叙留者是殊恩
也近代毎人叙留又叙四位後拜任常
事也三位少將者執柄息常被任之
又藏人頭時為少將是古例也又辨

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

らをいふなるへし

辨官兼之任官勘例に弁官兼任少將例
濟時伊周

將監雅亮裝束抄に志ずると訓り和名抄
に將監萬豆利古止比止

叙留の將監を左近大夫右近大夫といふ大夫ハ
五位の通称なり東野州聞書に左近大
夫と云ハ左近將監にありなるゝ從五位下
に叙したるを申侍るなり

諸大夫ハ昇殿を聽さるへきの順路なるゆ
ゑに叙留を執ける也

官兼之公達中有才名人事也近代
殊執之少納言兼任又希例也

將監 相當從六位上 唐名親衛校尉

六位諸大夫任之五位時叙留隨分
執之舞人樂人等任之即又叙留定
事也然而諸大夫者執之是各守故
實故也六位侍任之或執之或不執
之凡者不打任事也於叙留者更無

將曹和名抄に佐官雅亮裝束抄にさく
ほんとあり

府生職官志云按職員令衛門兵衛等
並不載府生然凡府生者往々經見
於史中久矣但未詳其置何世

番長ハ近衛舍人の中にて上首八人を補ひ
大將前駈の者なり新勅撰にこれ
れめや番ひのをさをささぶそ、ひらるゝも
しに匂ふさち花

近衛舍人職官志云即近衛舊是中衛之類
故称舍人因知其人所出亦内舍人大
舍人及兵衛之色續古事談に近衛

其例

將曹 相當從七位下 唐名親衛錄事

舞人樂人近衛舍人等任之

府生 唐名衛史

同前大將判授之

番長

近衛舍人中撰用之

上皇執政若給兵仗大臣及左右大

舎人ハ弓矢を具ハるといへども武勇之ハ
むよハぬものなり宇治殿の御随身な
四郎先生行武とゆふ者ありなり盗人を
捕て殿之挙て奏なりれハ御随身ハ近
習の者也かゝるの事けもゝらひのさまひて
そゝくしくさゝなりけるハつゝしミかゝめ
むきて申さゝるなり
上皇執政云ミ官職難義之兵仗ハ随身を
召具ゐる事也弘安礼節曰随身大上天
皇十四人将曹二人府生二人番長二人
以上騎馬近衛八人歩摂政関白十人
府生二人番長二人以上騎馬近衛六人
大将大臣八人納言参議六人中将四人
少将二人
左右衛門府の上之板本外衛の二字あり
并疑云印本外衛の二字を以て四衛府
の標目とゐるハ非也既之近衛府の上
之諸衛とあれハこゝ之外衛とゐる及
ハ注諸本死一従ふ一
左右衛門府職員令之衛門府掌二諸門

将必召仕之大納言大将不召仕府
生大臣大将以上召加府生也
左右衛門府　唐名金吾　又云監門
元者云衛士府嵯峨天皇御宇弘仁
二年十一月改云衛門府
督一人　相當従四位下　唐名金吾将軍
左衛門督者為中納言参議之人兼
任之近代無非参議任之例但源頼
家朝臣任左衛門督別義歟四府之
中殊執之右衛門者雖非参議任之
但近代無非参議四位任之例
佐一人　相當従五位上　唐名金吾次将
五位殿上人中任之
權佐一人
名家譜第擇其人任之必蒙使宣旨
又必可補藏人故也

禁衛出入礼儀以時延捺とあり大同
三年七月之廢して左右衛士府之併を
らるゝより然之弘仁二年十一月之又左右衛
士府を改て左右衛門府とそるゝより今
よて八一府なるを此度八衛士府をのそ
衛門府とせるゝる故之左右とゐる
督一人後紀延暦十八年四月辛丑勅衛門督元
正五位上官今為二従四位下一
源頼家東鑑之正治二年十月廿六日従二
近衛中将一任二左衛門督一
使宣旨とハ捺非違使佐るゝ宣旨之兼
て府権佐るゝ使をも兼ることなり
可二補藏人一とハ五位藏人之補ゐるゝ云藏人の
條ゐるゝ一

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

大尉少尉弁疑云此府令條ニ在て左右なし其大尉相當従六位下也延暦十八年四月廿二日格ニ督佐及左右兵衛府の相當を改ゑふとき衛門大尉以下猶舊の如し弘仁二年十一月廿八日ニ左右出来し時相當延暦格の制ニ准ずる拾芥抄も亦同し然るニ此抄大尉の相當従六位上ニ當る頗疑あり蓋三代實録貞觀四年三月四日の件ニ従六位下守右衛門大尉藤原好行と位卑官尊の位署ニ記するをおもふニ弘仁貞觀の間ニ大尉の相當を改ゑふ歟然とも三代格ニも其制を載せば疑ハしき事也まて秘抄云大尉令二人然而輙不任之為五位尉之中殊撰人少尉二人或及六七人中古以降始過十人而久安被下宣旨以左右各廿人為員數近代三倍歟まて百練抄久安四年正月廿八日左右衛門左右兵衛尉各廿人左右馬允廿五人内舎人六十人永可為員數之由被仰

大尉　相當従六位上　唐名金吾校尉

少尉　相當正七位上

顯官也仍六位諸大夫并侍尤可擇其仁也近代不及是非沙汰可謂無念其中蒙使宣旨者至于今為異他之儀又五位後叙留撿非違使之外未聞其例

大志　唐名金吾録事

外記とあるを以て考るニ員數の多きハ少尉の事なるへし

五位後叙留とハ尉より撿非違使をかけたる者のことなり

左右兵衛府ハ職員令ニ掌撿挍兵衛分配閤門以時巡撿車駕出入分衛前後上

従五位上令ニてハ従五位下也

少志

見撿非違使篇

府生　唐名金吾衛史

左右兵衛府　唐名武衛

督一人　相當従四位下　唐名武衛大將軍

中納言參議散二三位非參議四位等皆任之

佐一人　相當従五位上　唐名武衛次將

英雄ハ清花の事也この權佐を望ざるハ少將に直任のゆゑなり

大尉少尉秘抄云各一人其後任人多加而久安被下宣旨以左右各二十人為員數近代及三四倍

權佐一人

五位殿上人中可然之輩任之但英雄強不望之即任少將故歟

大尉 相當從六位下 唐名武衛校尉

少尉 相當正七位上

六位諸大夫并侍任之侍者自當府尉多轉衛門也諸大夫不必然

大志 唐名武衛録事

非要官とハ使宣旨を蒙らぬゆゑなり

府官とハてゝにハ府生の事也

左右馬寮ニ寮訓要云諸國の牧の馬を立ける延喜式に載る所毎年の御馬數百匹にはなり諸國の牧まで其數を知れ駒牽といふ事ハ八月だかりにて當時ハ侍ひとも月々の駒牽その數あり委細ハ延喜左馬寮式に見えたり職員令に掌閑馬調習養飼供御乘具配給穀草及飼部戸口云々上

少志

非要官仍府官之外強不任之

府生 唐名武衛史

同前

左右馬寮 唐名典廐

頭一人 相當從五位上 唐名典廐令

四位五位中可然之輩任之知寮務時尤為重職

助秘抄云往代英華貴種人多任之近代
経藏人之輩并公達任之

允秘抄大少各一人其後任人多加而久安
被下宣旨以左右允各二十人為員數
近代及四五倍

權頭一人

五位殿上人諸大夫共任之於諸大
夫者尤為清撰之職

助一人 相當正六位下 唐名典厩少令

權助一人

五位諸大夫任之其撰超于他諸司
助也五位侍任之太備眉目者也

大允 唐名典厩丞

近代の上諸本七位相當官也の六字あり
官位令にてハ大正七位下少従七位上也

兵庫寮令にてハ左右なり職員令に
掌儀仗兵器安置得所出納曝
凉云々

少允

七位相當官也近代六位侍任之瀧
口給官時任允是例也

大屬 唐名典厩主事

少屬

兵庫寮 唐名武庫署

頭一人 無權頭相當従五位上 唐名武庫令

五位諸大夫任之

助　相當正六位下　唐名武庫少令

權助

六位諸大夫任之

大允　唐名武庫丞

少允

六位侍任之

大屬　唐名武庫主事

少屬

外武官とハ六衛府これ内武官なりこれに對ていふ

將帥の帥字此ハ所類反にてス井の音也これ副將軍以上を指し

閫外とハ門外なり和名抄閫門限也一名閫苦本反和名之岐美とあり

漢書云々漢書馮唐列傳に唐對曰臣聞上古王者遣將也跪而推轂曰闑以内寡人制之闑以外將軍制之と見えて閫字闑に作れり註に門中橛為闑とありて門の内外の限の所に小木を建るをいふ

出左傳の三字旁註の攙入也左傳ハ僖公廿七年條に見ゆ漢書註三字又旁註の攙入也こハ李廣傳なる晋灼の注也板本細書とし今弁疑に依て大字に改む晋灼曰莫大也或曰衛青征匈奴絶大莫大克獲帝就拜大將軍於莫中府故曰莫府莫府之名始於此云々ま

外武官

將帥之職古今重之所以分閫外之權也漢書云馮唐曰王者遣將跪而推轂曰閫以内寡人制之閫以外將軍制之軍功爵賞皆決於外云々大將謂之元帥　出左傳　其居處謂之幕府

漢書註　將軍職在征行無常處所在為治故言幕府云々又稱將帥云麾下

又云戯諸軍之旌麾也云々又將帥有賜節鉞之制節度者所以示其信也斧鉞者所以專刑戮也本朝將帥之任起於神代也其初天照大神欲降天孫於豊葦原中國之時遣經津主神健雷神令平諸不順者大伴連遠祖天忍日命帥来目部遠祖天槵津大来目背負天磐靫臂着稜威高

鞆手提天梔弓天羽羽矢乃副持八目鳴鏑又帶頭槌劒而立天孫之前

云々神代之制粗可見矣

と師古曰莫府者以軍幕為義軍旅死常居止以帳幕言之

戯諸軍之旌麾也校本戯下漢書師古曰戯諸軍之旌麾也と作れり類本を以て改む漢書高帝紀曰諸侯罷戯下各就國註師古曰戯謂軍旌麾也これと依るに戯諸の諸は謂の誤なるんとも好もへと諸本みな諸と作れり改めつ

有賜節鉞之制これ節度と斧鉞との二物也下文ていおのつから明なり書經牧誓と王朝至于商郊牧野乃誓王左杖黄鉞右秉白旄以麾とあり孔安國曰鉞以黄金飾斧左手杖鉞示先事誅右手把旄示有事於教令のれと本朝にハ節と鉞と二物を賜る例なれこれ漢土の證を引るのミなり景行紀に四十年夏六月東夷多叛秋七月天皇持斧鉞以授日本武尊云々と見

えたるハ斧鉞の二物を玉へるまやと好もよこハおて文飾ていまこと神代より武器と斧鉞とふたりのあることなれハ古事記に給比ヒラキノ賜羅木之ヤヒロホコ八尋矛とあるに従て保古と訓へきその後矛を劒とかへたるまうに今以下の書どもにハ節刀と載たり軍防令標註にくいつ

經津主神云々神代紀曰是後高皇産靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者僉曰經津主神是將佳也時武甕槌命進曰豈唯經津主神獨為丈夫而吾非丈夫者故其辭氣慷慨故以即配經津主神令平葦原中國云々

大伴連云々以下六十九字神代紀の文也天槵津大来目ハ天津久米命の事なりん故えそハ古事記に故爾天忍日命如く同等の神なり然るにかく天忍日命帥来目部遠祖天槵津大来目と帥字を用て従卒の如く神代紀に記されるハ古事記傳云ニハ其子孫の衰たる時の趣を以て記されるなりと見えたり磐靫の磐ハ堅き由の稱辭也靫ハ矢を盛る器也後世の箙の如きものなり鞆ハ左臂に著け弓弦の音を助るものなり故に高鞆と云り稜威ハ字の如し天梔弓の梔ハ木名羽々矢の羽々ハ羽の狀也八目鳴鏑ハ上矢也頭槌劒ハ柏頭を太くしたる劒なるへし

物部氏古事記傳云物部ハ毋能ゝ布部
とゝふことゝて布幣を約ていふ也さてその
毋能ハ布とハ總て武勇職を以て仕る
建上の称にて萬葉ニ是を宇治の枕詞
ニ云ともいちじるき云意也されバ巻三ニも
武士ともかゝうかゝて朝廷ニ仕ふ人等を
凡も毋能ゝ布と云て毋能ゝ布之ゝ十
伴緒ともよめるも萬葉ニ多きハ上代ニ武
勇を主とゝされ一世の古言の遺れり一
なるさて物部と云者ハ一部の武士ニて
其ハ上代ニ殊ニ勇て武事の勝る輩か
ら一故ニ其部を殊ニ武士部と名つけ
られ一なり云々物部の名義ニ説の如一
此抄ニ道臣命を以て物部氏の祖と云ハ
誤也道臣命ハ大伴氏の祖也神武紀ニ
大伴氏之遠祖日臣命帥大来目督将
元戊丁時勅饗日臣命曰汝忠而且
勇加能有導之功是以改汝名為
道臣とあり物部氏の祖ハ饒速日命
なり同紀ニ饒速日命見天表長髄彦

凶逆懷猜不可教以天人之際乃
殺之帥其衆而歸順焉天皇素聞
饒速日命是自天降者而今果立忠
効則褒而寵之此物部氏之遠祖
也とあり今按ニ上文よりつゞく
依ニハ道臣命を載るなり一ハ
物部氏祖の四字を大伴氏祖の四字ニ改
の四字ニ改一しられ此條ハ將軍を任られ一る事を主意ニて武士の名目ハ旁義なれバ大伴氏祖道臣命と一ハ
四道將軍崇神紀十年九月甲午以大彦命遣北陸武渟川別遣東海吉備津彦遣西道丹波道主命遣丹波因以詔之曰若有不
受教者乃擧兵伐之既而共授印綬為將軍
皇子日本武尊云ニ景行紀四十年夏六月東夷多叛中畧天皇持斧鉞以授日本武尊云ニ即擧兵擊之則命吉備武彦
與大伴武日連令從ニその文ニ大將軍左右將軍の号ハ所見なしとゝ武彦武日の両人征行ニ從一るを以て是を推ニ
ゝ日本武ハ大將軍兩人ハ左右將軍なること論なし一
彼國置日本府一あるハ此抄ニてハ百濟の事也けゝ懇款を納て仕奉一ハ百
なしとゝ三韓其外いつれも置れ一るなし一その證ハ欽明紀二年ニ任那日本府と見えまた安羅日本府とも見えそう
殊ニ百濟ハ皇國の内官家一なり一ことニ仁徳紀四十一年春三月遣ニ紀角宿祢於百濟始分國郡疆場具錄鄉土
所出とある府を置れしハ國郡の境を分ち鄉土の産物を錄収なりの事なるへ一しまた雄畧紀二十年冬云々
百濟國者為日本國之官家一所由来遠久矣とある官家ハ即府のこと
一かを玉へる理を推て考ニ最然るへ一しこと也

至于人代神武天皇東征之日物部
氏祖道臣命為軍帥古楯武士云物部起於此云々
崇神天皇十年命四道將軍遣四方
云々將軍之号正起於此歟其後景
行天皇四十年以皇子日本武尊為
大將軍以武日命武彦命為左右將
軍東征蝦夷云々爾来征行之日命
將軍不可勝計我國平定新羅高麗
百濟之後百濟最納懇款依之彼國
置日本府遣鎮守將軍治之云々然

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

遣鎮守将軍治之とある日本府は将軍を遣わし一證なりと見えた欽明紀二十三年七月遣大将軍紀男麻呂宿禰大将軍大伴連狭手彦領兵数萬伐高麗これらをもて欽明抄の意日本府を以て将軍府の始とし一彼府より遣わして韓國を治めしめる人を鎮守将軍ともいえりしかもなお書紀を正しく其名目を載せねば此れ准后の臆案なり

聖武天皇御宇云々この事上陸奥國の條にいう

征夷征東等は征夷将軍征東将軍等（数職ある時征伐の為に命ずるなり）故に臨時の事也鎮守将軍ようの長ある例もあり類史に延暦十九年十月の征夷征討大将軍近衛権中将陸奥出羽按察使従四位上兼行陸奥守鎮守将軍坂上大宿祢田村麻呂と見えたり

鎮守府は東奥に置れて鎮西の太宰府に相對し中華東西の要鎮也太宰は文を旨として唐韓を掌り鎮守は武を宗として北狄を禦くまことにこれ右文左武の義ともいうべし

乃建将軍府之初在此乎聖武天皇

御宇陸奥國置鎮守府初任将軍遣

之若是本朝置軍府之初歟征夷征

東等臨時置之不聞有其府也

鎮守府

将軍一人

相當従五位上

唐名鎮東将軍

其任仍代々稱将軍者鎮府将也中

古以来為陸奥守者多兼鎮府不可

必然歟守者宜擇吏幹之才将者

須用藩鎮之器故也又昔並置府國

依恐于地廣而在邊要也以信夫郡

以南租稅充國府之公廨以苅田以

北稲穀充鎮府之兵粮云々又邊要

其任仍代々稱将軍者鎮府将也中古以来為陸奥守者多兼鎮府不可必然歟守者宜擇吏幹之才将者須用藩鎮之器故也又昔並置府國依恐于地廣而在邊要也以信夫郡以南租稅充國府之公廨以苅田以北稲穀充鎮府之兵粮云々又邊要

の地その兩府のこと今一一ハ上に載う

其任の任字板本仁に作る今古本に従う

鎮府将也の鎮下板本守字あり古本類本によりて削る

中古以来云々坂上田村麻呂の陸奥守にて鎮守将軍を兼ねるる國史の文を挙て上件のいうりこれを中古以来とのたまう

並置府國と鎮府と國司とをいう

以信夫郡以南租稅云々類史大同五年五月壬子言陸奥國元来國司鎮官等各以公廨作差令春米四千餘斛雇人運送以充年粮蝉因循年久於法死擾但邊要之事願其中國柯者苅田以北近郡稲支軍粮信夫以南遠郡稲給公廨其去國府二三百里於城柵七八百里事力之力不可春運若勤當停止必致飢饉請給春運功為例これをて公廨と兵粮

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

之中以陸奥為最仍此國昔置五千人兵也是皆可屬鎮府乎建武三年勅三位已上為當府將軍者可加大字者云々是依國司請奏被下宣旨也將軍相當五位也三位已上位高職下依之申加大字而已

副將軍二人

中古以来不任之

軍監

相當正七位下唐名兵曹參軍事

軍曹

相當從八位上唐名上鎮録事

堪武勇之士可任此職歟近代於軍曹者公卿給之時申之無其謂事也

僉仗二人

擇重代武士補之將軍判授之官也

凡僉仗者陸奥守同給二人按察使

家卿の請奏也

副將軍二人續紀宝亀四年七月庚午以正四位下大伴宿祢駿河麻呂為陸奥國鎮守將軍とありて五年七月庚申以河内守従五位下紀朝臣廣純為鎮守副將軍これ副將軍の始めてその時はまだ二人也その後は同紀宝亀十一年三月甲午以従五位下大伴宿祢真綱為陸奥鎮守副將軍また同年六月辛丑従五位上齊王後哲為陸奥鎮守副將軍この抄二人と書たる盤觸いろの真綱後皆也職官志に延暦八年池田真枚藤息墨繩並為副將軍所謂二人者蓋指此也といへるハいろ〳〵

中古以来不任之職官志云延暦十年陸奥介文室大原兼副將軍爾後復不任之故弘仁三年格乃

と別なるらむを知へし主税式に陸奥國公廨八十萬三千十五束國司料六十四萬一千二百束鎮守料十六萬二千五百十五束また凡陸奥國兵士閒食料米二千八百八十斛副年中所論租穀内毎年充之とありて公廨兵粮の員数をもまた知へし公廨と六國驛年中の費用なり

置五千人兵此事析々なる證文也

建武三年云々と建武年間記と載る北畠顯家卿の奏状に弘仁三年珠下勅符建立鎮守府將軍守卿之墨授將軍之号自置件職以降以従五位上階為彼相當而多為當國刺史兼之或為隣州牧宰任之爰顯家官昇八座位至二品依別勅任當州剰以勲功賞兼鎮守府位高而官卑願可謂遠先格所請者自今以後三位以上任此職日加大字以為永格と見えたり依國司請奏とまた顯

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

省之説如一
軍監ハ弘仁三年ノ格一人也軍曹ハ
弘仁三年ノ格二人也其事ハ上件
ニひかる三代格ニ見えり
可任ノ任守板本補ニ作ル今古本ニ従ヨ
公卿給之時云除目ノ時公卿ノ年給ニ問これを申されし邊鎮ノ部將ヲ在京ノ文官ノ倍從ニ充んこそ也甚そのいそれなき事也
儛伎ハ帯劔一ニ陪從ル者ノことなり類聚三代格ニ弘仁三年夏四月甲午大政官符加減儛伎負事鎮守將軍三人
減二人定二人とあるこれなり陸奥守ニも同ク二人ヲ一例ハ格ニ見えり中古ノ按察守より鎮府ヲ兼ル人ハ別ニ玉ハる故按察使ニ四人玉ハる例ハ三
代格弘仁三年四月甲午ノ件ニ陸奥出羽按察使四人元三人今加一人と見えり

給四人云々

征夷使ト東夷ヲ征伐ス使也東夷西戎南蠻北狄いづれも教化外ニ居ル
者なれバこれヲ征伐ス使必モあるへ
シ其中ニ東夷殊ニそく邊
境ヲ擾亂ルようて征夷ヲ以て名
目とし西南北をハこれニ附屬ルもの
のなり官位令ニ捻ニ將軍ヲ置れ
ル故ニ官位ノ相當なル集解云問
除將軍意何答將軍捻職員令ニ
有職掌但有所征討者臨時差宛

耳故不載此令也
因云征夷大將軍ハ武官なれハ帯劔ヲ
ことヲ勿論なるへシ〻〻就て議あ
りてハ帯劔ヲ定ル仍て
勅授となり暦仁元年四月六日
玉葉ニ頼経將軍ノ大納言ニて勅
授宣旨あり一事ヲ載セ云々帯
征夷大將軍載勅任除目下兵部
省ニ充可帯劔之由大外記師兼申之
而頼尚臣人申云將軍者尋常不
帯劔如忠文民部卿者為鎮東國
給節刀下向歸洛之時返上陸
奥守赴任之時必任鎮守府將軍
在國之間帯劔諸國司之中東國
多如此尋常帯劔不可出入宮門
之由見允亮勘文如軍防令者非
帯劔之任云〻仍被聞兩明法博士
有評議所被下此宣旨也されハ將
軍といへとも禁中ニてハ帯劔の職ニ
あらざる故ニ勅授の宣旨を蒙て帯

征夷使

大將軍一人

征夷者始於日本武尊毎有兵事遣
將帥也粗見舊記未置鎮府已往東
征人或為按察使或為鎮守將軍改
屋綿丸以来有征夷將軍之号云〻
愚案於鎮府者已有鎮將依之重遣
將帥之日臨時加征夷号歟坂上田
村麻呂者稱征東將軍平將門叛亂
時參議右衛門督藤原忠文朝臣任
征東大將軍其弟仲舒源經基為副
將軍發向其後征夷号久以中絶源

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

義仲朝臣京上暫執兵權之日任征
夷將軍云々其後又權大納言右近
大將源頼朝卿辭兩職歸東國之後
有勅被任征夷大將軍爾来連綿頼
家朝臣自少將之時兼之實朝公自
兵衛佐之時至大臣兼之彼流斷絶
之後藤原頼經卿下向元服以後即
任之其子頼嗣卿又任之中務卿
宗尊親王下向以後四代親王任
之元弘一統之初兵部卿護良親王
暫任之其後上野大守成良親王令
兼之給建武三年二月被止其号畢
凡頼朝卿補之後依重征夷之任不
並任鎮府元弘以来被並任畢建久
以来未任副將軍於軍監軍曹者時
時請任云々

劒帯也其ハ親衛の任なるを以て也このけちめを能〻弁ふべし

征夷者始於日本武尊ハ景行紀四十年六月東夷多叛邊境騒動七月天皇持斧鉞以授日本武尊則命吉備武彦與大伴武日連令従

未置鎮府已往ハ神龜元年より已往の事也按察使ハ養老三年七月より始て置れり為鎮守將軍の守守ら

くハ東字の誤り未置鎮府已往ハ鎮守將軍となれる所見なし元明紀和銅二年三月壬戌以左大弁正四位下巨勢朝臣麻為陸奥鎮東将軍とある准右これらを以てかくもあるべきなり欤

文屋綿丸以来云ハ日本紀畧ハ弘仁四年五月辛巳従三位文室朝臣綿麻呂為征夷大将軍とあれハ綿麻呂ハ征夷大将軍にて征夷将軍ハ補差別あり征夷将軍の始ハ元正紀養老四年九月に播磨按察使正四位下多治比真人縣守為持節征夷将軍軍監三人軍曹二人と見えたるこれなり但この時の征夷ハ東方征伐の事のこゝて四方の夷権を掌るハあらず同時ハ以従五位下阿倍朝臣駿河為持節鎮狄将軍軍監二人軍曹二人とありて北狄征伐の事をハ別ハ命そへられるを以て征夷の專任なるべし〻征夷大将軍の始ハ日本紀畧延暦十三年正月乙亥朔賜征夷大将軍大伴弟麻呂節刀とありこの時ハ専権を掌ら〻歸して征夷の任重くなれりされハ将軍も大将軍ハ綿丸以来ハあれ共ハ被並任ハ前なり此故ハ綿丸以来とのたまへハ暗記の誤也

坂上田村麻呂ハ征東将軍云〻公卿補任ハ延暦十五年十月甲申従四位下坂上大宿禰田村麻呂任鎮守

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

将軍日本紀畧ニ同十六年十一月丙戌為征夷大将軍ト見ヘ又征東ト為ル一事ハ所見ノ誤也
征東将軍ハ續紀ニ延暦三年二月己丗従三位大伴宿祢家持為持節征東将軍ト有リ日本紀畧ニ延暦十二年二
月丙寅改征東使為征夷使庚午征夷副使近衛少将坂上田村麻呂辭見ト見エテ此人ノ遠将ト為レハ四五
日以前征東ノ号ハ止メラレケン
平将門叛乱時ノ諸記ニ依テ考ルニ将門ノ叛乱ハ天慶二年ノ事也同三年正月ニ追討ヲ令ムル議定アリテ参議修理
太夫藤原忠文ヲ征東大将軍右衛門督トシテ其弟仲舒ヲ副将軍トシ発向ヲ令ムル藤原系圖ヲ按ルニ枝良ノ
子ニ忠文忠舒忠衡ト見エテ忠文ハ参議右衛門督正四位下征東大将軍忠舒ハ刑部大輔従四位下征東副将軍ト
あり又扶桑畧記ニモ忠舒トあれハ仲ハ忠ノ誤字ナルヘシ
源義仲云々百練抄ニ元暦元年正月十一日以伊豫守義仲可為征夷大将軍之由被下宣旨トあり此事ヲ東鑑ニ論シ朱
雀院天慶三年被補参議右衛門督藤原忠文朝臣以降皇家廿二代歳暦二百四十五年絶不補此職之處ヲ以
可謂布代朝恩歟トいう
辭兩職トハ権大納言ト右大将トヲ辭シ玉フヲ也公卿補任ノ所見元暦二年四月廿七日従二位文治五年正月五日正二位
建久元年十一月九日権大納言同月廿四日兼右大将十二月四日辭兩職カクノゴトシ
被任征夷大将軍東鑑建久三年七月廿日ノ件ニ云十二日任征夷大将軍
頼家朝臣自少将之時云々是誤也諸書ニ據テ考ルニ頼家ハ建久八年十二月十五日ニ従五位上ニ叙シ右中将ニ任キリ
ソノ時ヨリ頼朝在世ナリシカ正治元年正月十三日ニ頼朝薨シ玉フ将軍執権次第ニ頼家建久十年正月廿日轉任左中将
同廿六日可令奉行諸國守護事由被宣下ト見エテ左中将ニ轉任ノ後モ父卿ノ迹ヲ継テ惣追補使ノ職ヲウケ
玉フノミナラス将軍ニハ拝シ玉ヘル同書ニ正治二年十月廿六日従三位同日任左衛門督建仁元年七月廿三日
従二位権大将トあリ此ハ左衛門督ニナリテ征夷大将軍ヲ兼玉フ也
實朝公自兵衛佐之時云々實朝ハ頼家ノ弟ニテ頼朝ノ二男也建仁三年九月七日ニ従五位下ニ叙シ将軍トナリ
十月廿四日右兵衛権佐ニ任シ玉ヘルヨリ子時十二歳也
頼経卿ハ光明峯寺関白道家公ノ子安貞元年正月廿六日ニ征夷大将軍ニ補シ玉ヘリ實朝ノ薨後七八年ノ間ハ
平政子女儀ニテ兵権ヲ取ラレシヨリ将軍執権次第ニ但不蒙将軍宣旨頼経卿年少之間為彼代官所成敗
也ト見エタルヨリ如クナリ〻ヲ至テ此職藤原氏ニ移リ其子頼嗣卿寛元二年四月廿四日父卿ノ譲
ヲ以テ将軍トナリ玉フ
中務卿宗尊親王ハ後嵯峨帝ノ第一皇子也建長四年三月十九日關東ニ下向四月一日将軍ニナリ玉ヘリ
康文永三年七月廿四日三歳ニテ従四位下ニ叙シ将軍ヲナリ玉ヒ正應元年ニ至テ親王宣下アリテ二品ニ叙シ玉ヒシカノ次後深草
帝第二皇子久明親王正應二年十月十日将軍ニ補シテ下向ス久明ノ御子守邦親王延慶二年□ニ将軍宣下アリテ即三品
ニ叙シ玉ヒテ元弘三年ニテ當職同年五月廿二日北条高時伏誅ノ時御出家同八月十六日薨玉ヘリ
護良親王尊性之ソレイシヨリ大塔宮ノ御事即後醍醐帝ノ第三皇子也ソレヨリ法衣ヲ脱テ義
兵ヲ擧玉ヒ元弘三年六月ニ右大弁清忠卿ヲ以テ奏請シ征夷大将軍ニ補玉ヘリ然ニ同年ノ十月ニ尊氏ノ讒言
ヨリテ終ニ大樹ノ職ヲ奪レ玉ヒシヨリノ間六月ヨリ十月ニテ纔五月ノ間ナリシ故ニ暫任トハ申ス但将軍ハ相當ノ官ニ
あらぬ任字いかゝ也
成良親王ハ後醍醐帝ノ第九皇子也建武元年十月ニ征夷大将軍ニ補シ延元三年ニ薨玉ヘリ
被止其号畢ニハ成良親王征夷ノ職ヲ辭シ玉ヒテ後建武三年二月ニ源顕家卿奏請シテ鎮守将軍ニテ三位以上ニ
ハ大字ヲ加ヘヽ物ヲ玉ヒ後鎮守ノ任重クナリシカハ征夷大将軍ノ号ヲハ止玉ヘリ是ヨリ兵権両方ニ分レタルヲ却テ國家ノ
為ナリシトノ遠慮ニ依テなり
被並任ハ護良成良等ハ征夷ナリ顕家ハ鎮府ナリヲ云
未任副将軍ノ任字補トカヽレシ三内口決云副将軍事建久以後死其沙汰況於當時者依被重将軍家蒲不及沙
汰侯

国立国会図書館　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82
ガラス使用

837
6
82

予從出俗塵云々ハ堆后元德二年九月ニ三十八歲ニて入道しまへり興國二年ハ實ニ十年後也

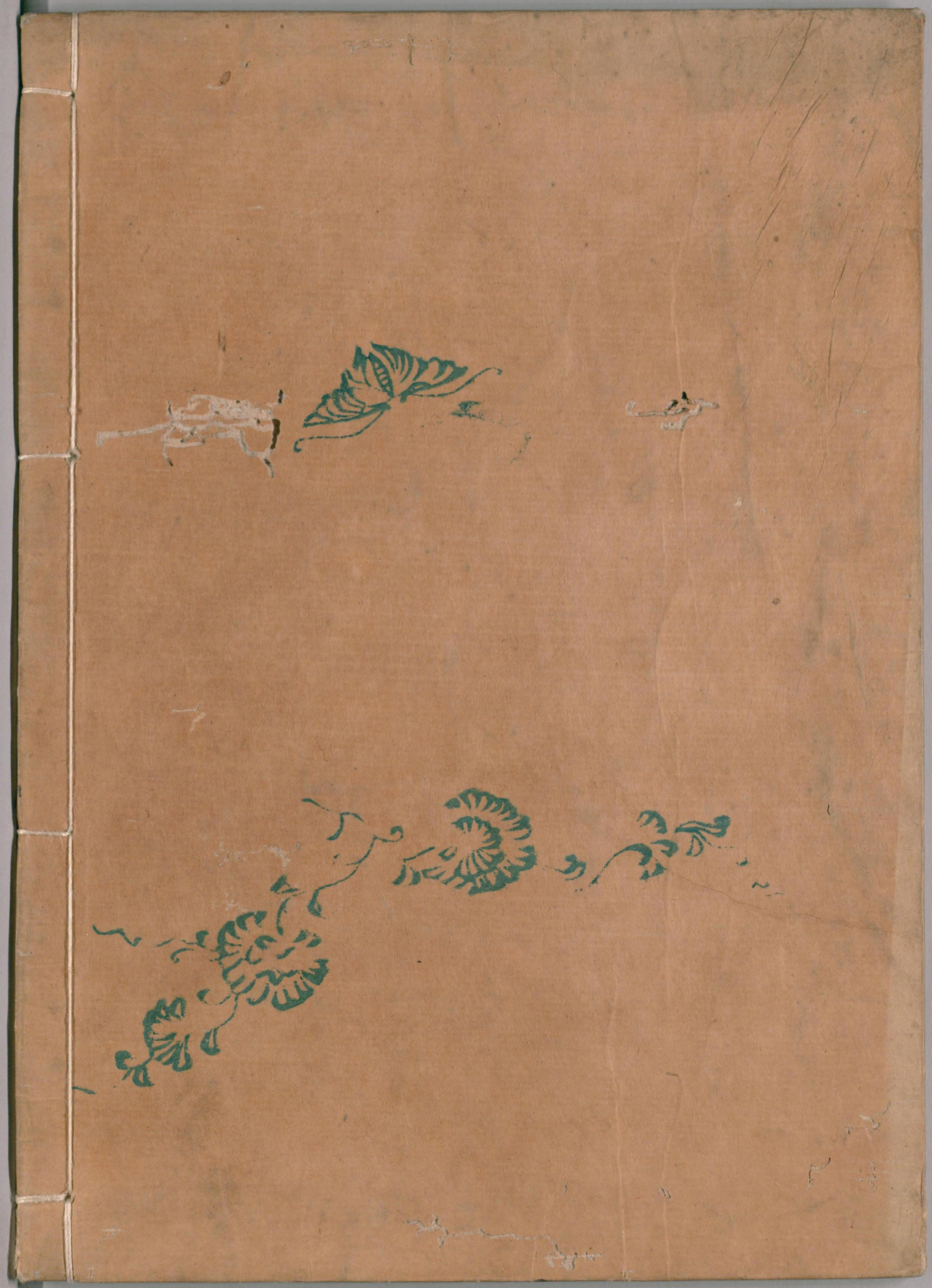
逆旅ハ客舍也堆后この時常陸小田城ニ居ます

蒙盆とハ明衡往來ニ蒙盆如向壁といへり物の分明なる事弁知しかこそなり

上章云々太歲在庚を上章といひ在辰を執徐といふ二月を夾鐘としてその二月の節より廿八九日過ぐる時とを候豫といふ

或人請聞官位昇進之次第欲傳口實可似臆說欲貽手澤有慙來者予從出俗塵已移十年之寒暑況在逆旅不蓄一卷之文書每事荒忽恰如蒙毛上章執徐之春夾鍾候豫之日强而染翰聊以終卷見引餘習不顧後嘲耳

標注職原抄校本卷下



国立国会図書館　　タイトル『職原抄校本 3巻』 請求記号 837-82

ガラス使用